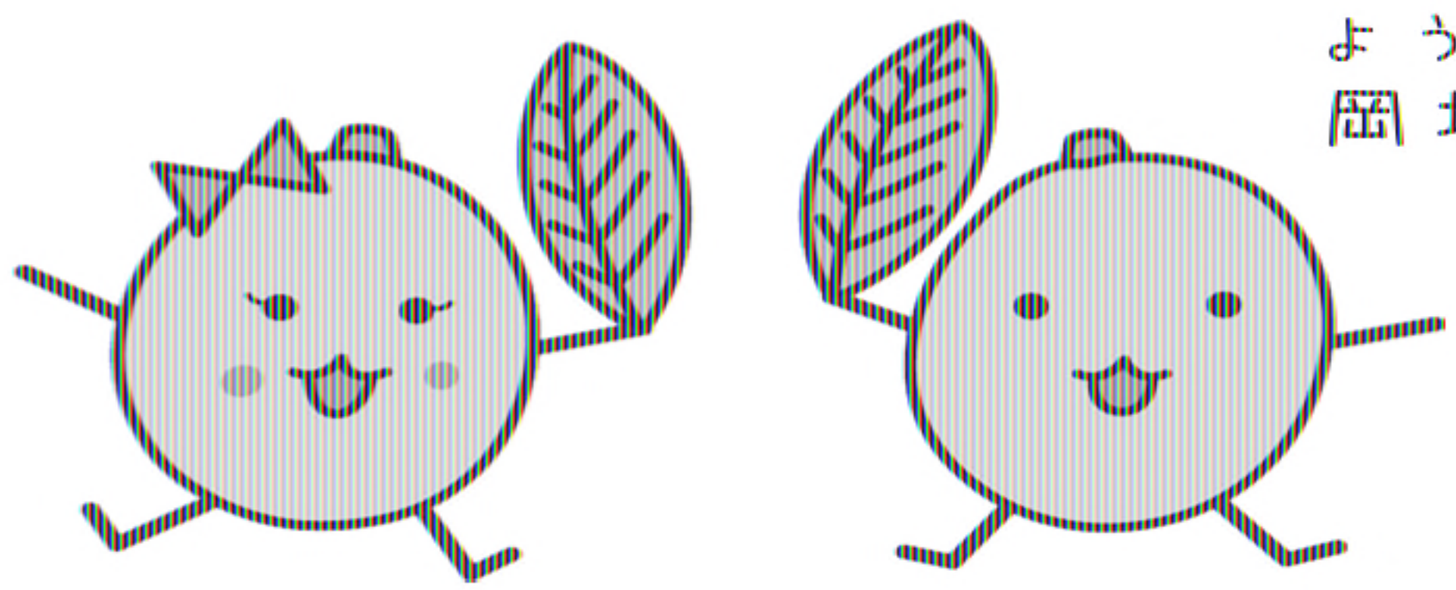
2017年度

地域連携事業【岡垣町／九州共立大学】

岡垣学Ⅰ

～『岡垣町史』等にみる岡垣の民俗～



ようこ
岡垣町

Ⅰ　ムラのならわし

1　ムラの一生

2　ムラの習俗

Ⅱ　ムラの言い伝

1　ムラの民話と伝

2　生活の中の知識

「岡垣学Ⅰ」の刊行にあたり

「岡垣学Ⅰ」プロジェクトの目的は、岡垣町が有する地域資源と大学の学びを協働させ地域活性化の活動を通してまちづくりに寄与することです。

この目的に沿って実施した地域連携事業が『岡垣学Ⅰ』プロジェクトで人も訪れてみたい町・住みたい町、町内の皆様にとっても住み続けたい町輝く町『岡垣町』の魅力“再発見”をテーマに、岡垣町が発行しているパンフレット等をもとにボランティア学生がテーマごとに整理しながら冊子）を作成する取り組みです。町の魅力をまとめた「岡垣学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」画で構築する予定にしております。

今年度は「岡垣学Ⅰ」として、『岡垣町史』（岡垣町史編纂委員会編）を岡垣の民俗について、ムラのならわし（ムラの一生、ムラの習俗）、ムラのムラの民話と伝説、生活の中の知識）を整理しました。岡垣の町民の皆様外の皆様にもご一読いただき、岡垣町に古くから伝わる習慣や風習にもっていただき、その歴史を再認識していただければ幸いです。そのこ元を活性化させる一助となることを願っています。また、本プロジェクの「岡垣学Ⅱ」、さらに再来年の「岡垣学Ⅲ」と充実した内容で進めてい

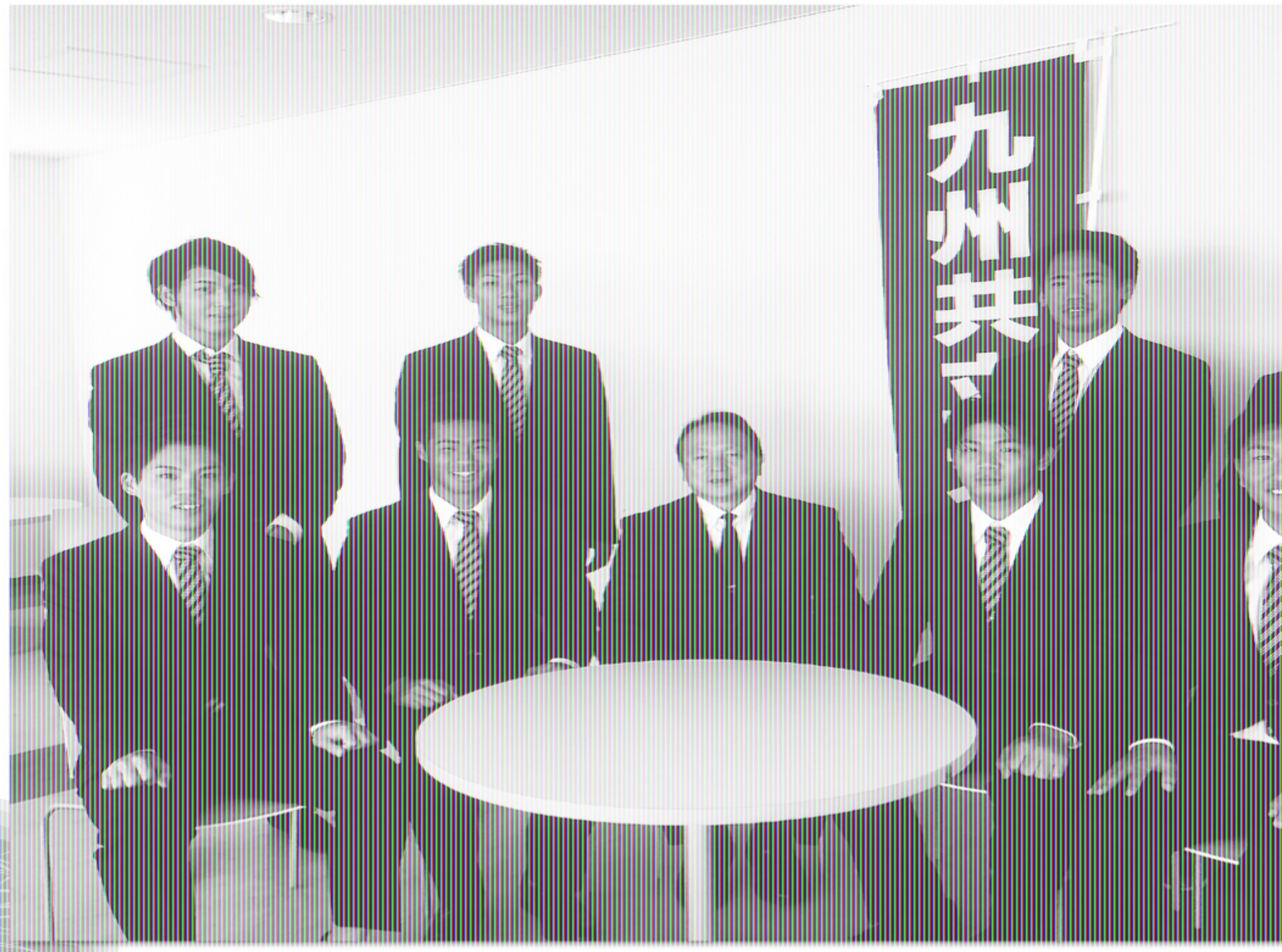
ご期待をしていただきたいと思います。

九州共立大学　スポ

山田

【プロジェクト・メンバー】

指導教員	九州共立大学スポーツ学部	山　田　　明	
学　　生	九州共立大学スポーツ学部３年	二田水　孝　至	九州共立大学スポーツ学部３
	九州共立大学スポーツ学部３年	福　丸　聖　也	九州共立大学スポーツ学部３
	九州共立大学スポーツ学部３年	植　山　勘九朗	九州共立大学スポーツ学部３
	九州共立大学スポーツ学部３年	柴　田　聖　矢	九州共立大学スポーツ学部３



目　　次

Ⅰ　ムラのならわし

1　ムラの一生　1～8

（1）産育のならわし　1～3

① 妊娠・安産祈願

② 帯祝い

③ 出産

④ 宮参り

⑤ 初正月・初節句

⑥ 初誕生

⑦ その他

（2）年祝いのならわし　3～4

① ひもとき・へこかき

② 成人の祝い

③ 厄年・賀の祝い

（3）婚姻のならわし　4～6

① 通婚圏

② 婚約

③ 嫁入り

④ 祝言の儀礼

⑤ 里歩き

⑥ その他の婚姻様式

（4）葬送のならわし　6～8

① 生と死のわかれ

② 枕飯

③ 告げ人

④ 通夜

⑤ 納棺

⑥ つぼとり（墓穴掘り）

⑦ 葬式

⑧ 死後の供養

2　ムラの習俗

（1）ムラのしくみ

① ムラの組織

② 労働慣行

③ 講

④ 年齢集団

（2）家族の生活

① 分家慣行

② 家号

（3）祭りと信仰

① 貴船社

② 天神様

③ 庚申信仰

④ お日待

⑤ 疫神社

⑥ 菩薩振興

⑦ 如来信仰

⑧ 千人参り

⑨ 大師講

Ⅱ　ムラの言い伝え

1　ムラの民話と伝説　15～21

（1）そば粉と善財坊
（2）悲恋二体地蔵
（3）名馬磨墨と牧場
（4）碁石原と七不思議
（5）八かめ一空
（6）野間のハシゴソーメン
（7）道満さま
（8）矢矧川と弓の矢
（9）えんま様になった嘉一郎
（10）源五郎鮒
（11）垂水峠のカッパ

2　生活の中の知識

（1）俗信とことわざ
① 予兆
＊天気に関する
＊吉凶に関する
② 禁忌
③ 厄婚姻・出産・
（2）民間療法
（3）呪的療法

［出　典］

＊「岡垣学Ⅰ」の作成につきましては、岡垣町から提供していただいた以下の書籍を引用・参考使用させていただきました。

『岡垣町史』（岡垣町史編纂委員会）1988年
『岡垣町伝承民話集』（岡垣町教育委員会）1995年

Ⅰ ムラのならわし

1　ムラの一生

（1）産育のならわし

産育、つまり妊娠・出産・育児にかかわる習俗や儀礼は、人の一生における最初のもの
までは単に一個人、一家族にかかわることではなく、地域社会（ムラ）の重大な関心事
産育のならわしは、妊娠・安全祈願に始まって、生まれた生児の健全な成長を願うとと
をも含めて、神仏への祈りから呪術的な儀式まで加わってきて、さまざまな習俗がつく
れてきた。

① 妊娠・安全祈願

結婚してもなかなか妊娠しない夫婦は、氏神や産土（うぶすな）神に参って子を授
「たね子（ご）」の風習もみられた。子宝に恵まれない夫婦は、親戚より非相続の子を
て育てると、実子が生まれると言われていた。その「たね子」は養子であるが、実子
と言われている。安全祈願はムラによって異なる。町内では、山田の氏森神社、内浦の
として参る人が多く、お座も開かれていた。ほかに、宗像の山田の地蔵様、鞍手郡宮田
き）の地蔵様、粕屋郡宇美町の宇美八幡宮などへ参った。参詣がすむと、守り札、糸
けてくる。それを神棚に祀ったり、腹巻に巻き込んだりして出産にそなえた。無事出産
必ず行った。

② 帯祝い

妊娠すると五か月の戌（いぬ）の日に腹帯［岩田帯］を締める祝いをする。妊娠した
る儀礼である。糖塚、湯川では帯始（し）、内浦では岩田帯祝いと呼ぶ。戌の日を選ぶ
すいことにあやかろうというものである。この日、嫁の里方から紅白の晒（さらし）
さんに腹帯を締めてもらう。腹帯の長さはムラや里によって異なるが、八尺または一丈
近親者、里の母親、近所の人を招いて、赤飯、尾頭付きの魚などでお祝いをする。

② 出産

出産を穢（けが）れとみたり、忌（い）みとして扱う考え方は古代からあったとい
も「赤不浄（あかふじょう）」と呼んだムラもある。波津の漁業者は、二週間は波津城
初産は嫁の里方で、第二子からは婿家で行うことが多い。初産の時は、出産予定日の
が「虎が千里の道を行って帰る」故事にちなんで、産月（うみづき）の寅（とら）の
もある。産後は二週間くらいで婿家に帰るのが通常である。お産は大正のころまで「
ソババサン」と呼んだムラの経験を積んだ老婆に頼んでいた。その後、産婆（助産婦
産室は、納戸（なんど）か北向きの部屋が使われ、畳を上げ板張りの上にお産用のぼ
を入れた布団などを敷いて産んだ。出産の方法は、座産（ざさん）から寝産へと変わ
つるした力綱（ちからづな）［力帯］や棒を握りしめて陣痛に耐えた。出産が始まる

み）［生み神］に供物をあげ、安産を祈ったところもある。三吉では、「腰で産まして、水飲すりゃ安産」と言っていた。後産［胞衣（えな）］の始末は、壺（つぼ）に入れて所に埋めた。大正時代になると、産婆さんを通して共同焼却場で焼却するようになった感謝し、しお［汐井］で産室を清めた。産湯（うぶゆ）は不浄なものとして地面に穴を こともある。産後は、三日目に三つ目の祝いをした。この日産神様がお立ちになるとい 置き小豆飯を供え、産婆さんを呼んで祝った。七日目は名付け祝いで、親戚、近隣に お（さんじょく）の忌明けで「アラビアケ」「ヒアケ」といい、この日から産婦は産室を出 ることが許された。

④ 宮参り

産婦にとってはこれが公式の忌明けであり、生児にとっては氏子入りを通して社会的 る。期日は男児が三十日目、女児が三十三日目がほとんどであるが、野間では男児三十 日目である。この日、里方から贈られたお宮参り着物を生児に着せて、姑、里の母と一 塚では氏神様の社殿に寝かせ泣き声をあげるまで待って祝いをした。また、元松原では の親戚に寄り、丈夫に育つようにと、いりこでデコ［額（ひたい）］を三回さすっても の行きと帰りは道をかえていた。百日目になると、百日（ももか）祝いをした。生児 め」をするもので赤飯、鯛の尾頭付きの吸い物で祝った。生児にも一人前の膳を整え、 せた。近所には赤飯や紅白の餅を配った。

⑤ 初正月・初節句

生児の無事な成長を祝い、初めて迎えた正月のお祝いをする。里方より男児には破魔 なまり）・羽子板を贈る。また、女児の時には、床柱（とこばしら）や大黒柱に柳つい ある。ムラ、小組では、破魔弓代、羽子板代をお祝いとして贈り、嫁の里、親戚なども 日［四月三日］は女児の初節句であり、ひな節句といった。ひな人形は泥人形に色彩を を飾り、紅白の餅、菱餅（ひしもち）をついて供え近所にも配った。近所からは、ひ 贈った。この日の祝膳は、赤飯とともに田螺（たにし）の佃煮や味噌あえを食べた。田 にかからぬといわれている。麦餅の色は、白・黄・赤（桃）または緑の三色で、黄は （よもぎ）［ふつ］を使った。五月五日は男児の初節句を祝う。親類からは鯉幟（こいの が贈られ、幟は節句前からあげられていた。幟は、戦前は吉木の伊規須染物店で作って 海軍記念日ということで、この日に端午の節句の祝いをしていた。この日は粽（ちまき んじゅう）［餅］を作り近所に配った。男児には、菖蒲（しょうぶ）の葉で元気に育つようにと鉢巻をさせた。菖蒲は二、三本組にしたり、蓬と結わえたりして屋根に投げあげ魔除（まよ）けにしたり、中風除けを願って菖蒲湯に入ったりした。また、この日の粽を仏壇の前、大黒柱にくびったり、下げたりして落雷除けのまじないとした。

＊写真（つちびな）909頁『岡垣町史』
（岡垣町史編纂委員会）1988年

⑥ 初誕生

初めての誕生日が来ると、無事に育った生児の初誕生の祝いをする。嫁・婿双子の両
囲んだ後、一升の鏡餅［紅白］にユリをかぶせ、男児は草鞋（わらじ）、女児は草履
「鶴は千年、カメは万年、あなた百迄（まで）、わしゃ九十九まで、共に白髪の生えるま
りのうえを踏ませる。その後、算盤（そろばん）、鋏（はさみ）、秤（はかり）、筆、メ
時計等を並べて生児にとらせ、一番先に手にした物で、その子の将来を占った。また、
は、親不孝するといって鏡餅を風呂敷に包んで背負わせ、転ぶまで歩かせた。山田でい
キタオシ餅」と呼んだ。近所、親戚には塩あんこ入りの紅白の餅を配った。

⑦ その他

産育の習俗は、通婚、交易のつながりで、ムラによって地域性がみられる。芦屋町の
の節句を祝う。この日男児に、車のついた馬をつくり、それに乗せて村の中を引きま
片葉ダゴを作った。また、子の成長の願いは、「かり親」の風習としても残っている。
い親など、他人と親子関係を結ぶ「拾い親」の風習は、高倉、戸切、海老津等でみら
順調に育たなかった時など、次の子を故意に辻や橋のたもとに捨て、他人に拾ってもら
う。また同じ理由で養い親に抱いてもらったり、二、三日預けたりすることもあった。
には届け物をしたり、農作業の忙しい時に手伝いに行ったりして縁を続けた。産育のな
の人々の喜びの中で行われたが、その祝いの品も、三つの「入れ子」に米いりこを添
常は贈るようになっていたところもある。布八尺は一つ身の着物一枚分であり、二軒分
テクリが一枚できるということで、生活・暮らしの知恵がうかがえる風習である。

（２）年祝いのならわし

① ひもとき・へこかき

現在の七五三の祝いに当たるもので、三歳［波津では五歳］になると「ひもとき」の
の背中に千鳥掛（ちどりがけ）でひものついた一つ身の着物から、前身にひもをつけた
改まる。またこの時からは、自分の箱膳がもてるようになる。それで、「お膳（ぜん）
あった。さらに成長し、旧岡県村では七歳、旧矢矧村では九歳になると「へこかき」の
褌祝（へこいわい）という。また女児の祝いを「ゆもじかき」ともいう。この日から
児は湯文字（ゆもじ）［腰巻］をつけさせる。

高良大社のへこか

② 成人の祝い

現在のような成人式はないが、女児は、初潮祝いがある。この時は赤飯を炊いて、た。高等小学校を卒業すると、男は若者組［青年団］、女は娘組［処女会］へ入会するなった。着物も、一つ身から三つ身、四つ身そして本裁ちとなり、やがて肩上げも取れとを社会的に承認される。

③ 厄年・賀の祝い

厄年とは、特に災いや障りのある年の意味で、この年に当たると言動を慎しみ、神種々の方法が講じられた。四は死に、九は苦に通じるということで、この数字のつく年垣でみられる厄入りは、女の三十三歳と男の四十二歳である。また、四十四歳は厄明けけをした。厄年になると旧正月にも餅をつき年を重ね、年をとりなおすといって厄逃れ三の厄は厄逃れのために、里方から帯、着物など長いものを贈った。四十四歳の厄に月四日におこもりをして厄明けを祝った。吉木・新松原では、氏神様の梅の木の下で、ラでした。原では個人的に祝った。賀の祝いも厄ばらいをかねた儀礼の一つと考えられ施行の「岡垣村吉木区基本財産蓄積同盟会規約書」によれば、三十三、四十一とともに十［古稀］、八十八［米寿］等の賀の祝いのあったことが記されており、少なくとも明いる。同類の規約が、原、元松原区にもある。

（３）婚姻のならわし

男女が一人前に成人すると、結婚して新しい生活が始まる。それに関する儀礼、習俗がる。今までの時の流れの中で、いくつかの婚姻様式［婿入り婚、足入れ婚、嫁入り婚なな形で入れ混じり、その地域の習俗、儀礼を生み出してきている。

① 通婚圏

時の入れ変わりとともに、生活交流、交易の範囲が広がると、それに従って通婚の（じご）どうしとか、地着（じつき）の嫁とか言われるムラ内での婚姻から、次第に広矢矧（やはぎ）村では、村内、遠賀、宗像などとの通婚がみられ、糠塚はその地理的位囲に含み、旧岡県村では、村内か宗像と通婚がほとんどである。岡垣町唯一の浦方である同士で村内、鐘崎などとの縁組が多かった。

② 婚約

配偶者の選択が、当事者同士によるものか他者に依存するかによって、婚約、結婚のつて若者組・娘組などがあり、ムラの行事の場など出会いの場が自然に結びつきをもた勢の変化は男女の出会いの場を失わせた。それと共に他者を通じての結びつきが多くなするのは、行商に携わる人や親族等で、その情報によって娘の働き振りを見に行ったり して相手をみつけ［陰見（かげみ）］、仲人を立てて婚姻の約束をとりつける。仲人は運ばなければならないと言われている。娘とその両親が承諾すると、すぐに仲人によ酒］が届けられる。すみ酒は酒一升、鯛一尾であるが、これは「一生一代」にあやかが届けられると娘の家では、親戚や近所の人を招いてすみ酒の披露をする。これは大かったが、波津では亥、寅、午の日は避け、また、引き潮の時刻も避けて行われた。

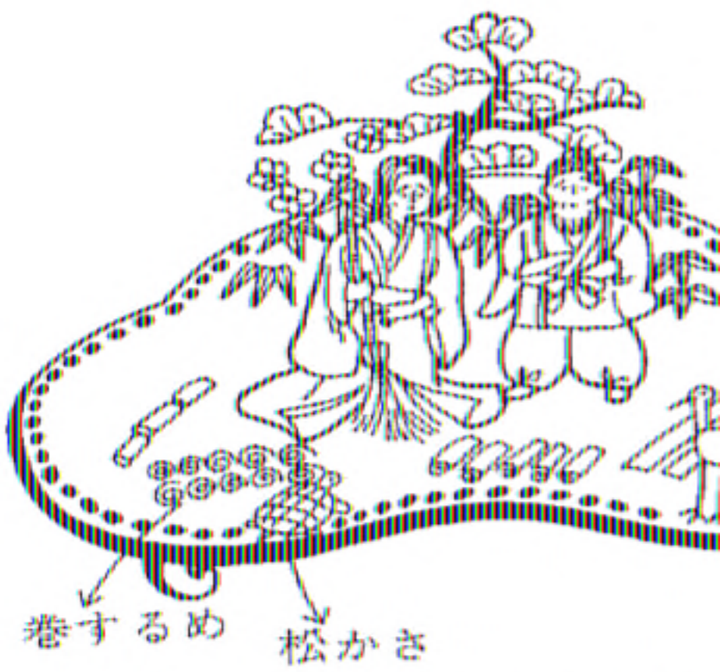
結納（ゆいのう）の儀となる。元の意味は、結（ゆい）つまり労働力の交換を行う間つまりユイノモノに由来していると言われている。仲人は結納の品を携えていく［代表でお茶、するめ、昆布、のし、酒、鯛、帯、着物などである］。酒は二升、鯛は夫婦鯛塩でしめたものであったというが、現在では鮮魚から御鯛料として金銭へ移ろうとして金となった。この日に祝言、嫁入りの日取りを農作業、暦などを考えて決めた。

③ 嫁入り

荷運びは式の二、三日前に行われていた。嫁入り道具は大正の末ころでは、箪笥（れ］、鏡台、たらい［三つ組］等に油単（ゆたん）をかけて持参した。村の若者たちからムラへ嫁入りが行われる時、村境で嫁方の村から婿方村への荷渡しが行われた。い）、婿方は黄手拭で鉢巻をし、中継ぎの場所では、酒、肴（さかな）を婿方が持参し相方の若者たちは、「ワイサ、ワイサ、ヤル」「ワイサ、ワイサ、ヤラナイ」と言い合っ山立ち［門出］の習俗として、ムラの氏神へ必ず参ったが、行きと帰りは同じ道を避け嫌った］。「見立て」等と呼んで、親戚、友人などと門出の膳を囲むところもある。この いるところがある。一方、花嫁は仲人と共に当日の昼、「嫁迎え」に嫁の家にも挨拶に すると「あんまりたいしたことない」と言われるので早々に引き揚げたという。これ（むこいりこん）」の名残と思われる。やがて夕方、出迎えの仲人と花嫁は家を立つ。家 ぬようにと花嫁の茶碗を割る風習もあった。花嫁の一行は嫁入り道中を続けて、婚家 ど）に着く。中宿は婿方の親族の家をあてる。中宿で休憩し、衣装を改め、化粧直しを かう。花嫁には、両親をはじめ親族にも一緒に道中をしたが、そのほかに「嫁マギラス が付き添ったり、「アリツケ娘」「アリツケ母さん」と呼ばれて世話をする人が付き添っ 世話をしたそうである。内浦では、「嫁女おなご」と呼ばれていた。入家の儀礼として らずに勝手口から姑さんに手を引かれて入り、台所からあがると、まず仏様にお参りを いただいてから式場の座敷に通された。

④ 祝言の儀礼

座敷では、花嫁、花婿、仲人とともに上座に座り、縁側に嫁方、向かい合って婿方と、血縁の近い順に上座のほうから座る。杯事（さかずきごと）は、夫婦（めおと）杯、親子杯、兄弟杯、親族杯の順に行われる。これには、杯を運ぶ役の「オチョ・メチョさん」［銚子（ちょうし）の飾り折紙の雄蝶雌蝶（おちょうめちょう）に由来する］があたる。親族か近くの小学生くらいの男女に頼んだ。夫婦杯は三三九度（さんさんくど）ともいった。この杯事［杯かわし］のときは、島台［高砂台ともいわれる］を座敷の真ん中に置いた。祝杯が終わると、台上のコブ、スルメを皆に配った。島台の飾りつけは、組内の加勢人（かせいにん）［糠塚］や青年たち［元松原



＊写真（島台）915
（岡垣町史編纂委員

［披露宴］は、本客、男客、女客［お茶のみ］、友達客、組内の加勢人を呼ぶ「まな板流 た。本客は夜を徹して行われ、宴のおひらきの「かゆ」が出されて帰途についたところ は、村の若い男女は障子に穴をあけ、祝言をあげる二人を盗み見たということであ

「おのし出し」があり、花嫁の立ち振る舞いが人々の評価の対象となる。熨斗（のし）を三方（さんぼう）の上に載せて使用した。

⑤ 里歩き

初歩き［一番歩き］は、五日目に行った。夫婦と両親で、饅頭、赤飯、餅などを持参親に挨拶に行った。村によっては、六、七升の餅をつき「大イレコ」に入れ里方へ持っ饅頭は、吉木の梶木店で作ってもらった。「初歩き」は日帰りをする。帰りには、里方に持たせた。土産の品は、下駄が多かったようである。村によっては少しずつ違いが両親だけで行くし、新松原では、嫁の親が初入（はついり）して近所に挨拶まわりを と姑と一緒に組内に風呂敷などを持ってあいさつに回った。また波津では、この初歩が、嫁がそのまま婚家に帰ってこないこともあったので、嫁が帰ってきたら一安心したところ、嫁が二番歩きをする。このときは、一週間くらいゆっくり泊まってくるが、夜泊（みよどまり）」といって嫌う。やむを得ない時は、何か身に着けたものを代わうである。

⑥ その他の婚姻様式

吉木では「足入れ婚」があったこともある。婚の家で、一年間くらい女衆のように式な結婚を決めることがあった。旧矢矧村では「かつぎ嫁女（よめじょ）」、旧岡県村習がみられる。これは、本人同士は恋愛関係にあるが、女の方の家族や周囲の人々の の婚姻が成立しにくい時、娘をムラの若者たちが連れ出し、いったんムラの有力者の家きによって両人の結婚が成就するように仕向ける風習である。

（4）葬送のならわし

人生の終着駅は死である。個人の生涯をしめくくる葬送のならわしは、最後の最大の きる。その風習は、死者の遺体の処理と、その霊魂観をめぐって移り変わってきた。

① 生と死のわかれ

古くから魂の存在を信じ、その魂が肉体から離れても活動でき、魂がもう肉体に戻 じてきた村人たちは、人が息絶えようとする時、枕元で近親者がその魂を呼び戻そう ぶ「魂呼（たまよ）ばい」と呼ばれる風習が岡垣にあった。病人が片息（ハフリ）に 水を含ませて、唇を湿らせてやる。これを「末期（まつご）の水」といい、永の別れを また、この間も死者の「魂呼ばい」を続け、この水の力で魂を再びよみがえらせる た。

② 枕飯

息を引きとった死者は、北枕に寝かせ、布団の上に死者の着物を逆さまにかけた。 物の裾をかぶらせた。その枕元には、一本花、枕飯、戻り団子を供える。枕飯は一握 残さず一杯盛り切りにした。元松原では茶碗一杯分炊いたという。その上に箸を一本 侶から枕経（まくらきょう）をあげてもらった。死は穢（けが）れ、忌みに入り、黒 もいう。それで、神棚、荒神様を白紙でおおい、戸口に忌中と書いた紙を貼った。

③ 告げ人

ムラ、組内に死者が出ると、組合で手分けして葬式を手伝った。まず、告げ人が死亡
話のない時代には、大切な役目であった。組内の足の強い人に行ってもらうが、一人
必ず二人組で行った。通知は、死者のこと、通夜、出棺等であった。かなり遠方まで行
を受けた家では、有り合わせの酒肴を振舞って、その労をねぎらったという。

④ 通夜

死亡の知らせがあると、村人はまず、野良着のまま「おくやみ」に駆けつけ、その
「夜とぎ」ともいい、死者を見守るため、夜通し起きていて、灯明、線香を絶やさない

⑤ 納棺

葬式も土葬から火葬になった。土葬の棺は屈葬用の桶棺（おけかん）かカメ棺であ
組の仕事であった。桶棺はその日に作り、カメ棺は芦屋、赤間、鐘崎から買った。吉
そこから買った。カメ棺を使うときは穴をあけやすくするため、底に酢をたらすか塩
に茶がら・茶の葉を底にしいた（平常より用意し、天井からつりさげていた）。一方、
親者によって行われることが多く、三人組で行った。黒山では男三人、戸切では男二
る。三人は、破れ着物を着、縄の帯を前結びにする。部屋の畳をはぐり、または裏返し
といって水から先に入れ次に湯を入れ、その水で死者の体をふいた。死装束は、組の
を鋏、物差しを使わずに裁ち、麻糸で糸尻を結ばずに縫い上げた経帷子（きょうかたび
に着せる。手甲、脚絆（きゃはん）をつけさせ、組ませた手には数珠を持たせる。納
垂れの下の砂を、お経を唱えながら死者に振りかけると、死者の硬直がほぐれると言
と、履物［下駄、草履］、「サンヤブクロ」には、枕飯、団子七つ、六道銭として一文
れて、死者の愛用の品々と共に納棺する。妻が先立つ時は夫の帯の端を切り、夫が先
棺の中に入れた。

⑥ つぼとり［墓穴掘り］

墓穴掘りのことを「つぼとり」「土とり」と呼んだ。これも組の役目であり、一番
三人が一組になった。ムラごとに「つぼとり帳」があり、順番が定まっていた。つぼ
た服装で仕事した。三人には、丸く握ったおにぎり、お煮しめ、酢の物などの弁当と
掘り道具は穢れたものとして門口（かどぐち）に並べて置いた。

⑦ 葬式

葬式の日、近親者は故人と縁のある人々で、「非時（ひじ）」「お斎（とき）」と呼ば
の後に葬儀が営まれ、出棺となる。棺の蓋（ふた）をするが、金物を嫌い石を使って
は畳の四角（すみ）をあわせて敷く。近親者が棺を担ぐが、この時、額に三角布をこ
に三回まわる。その後、戸口を出るが、その時、生前使用していた茶碗を割り、直ち
（わらぼうき）で掃く。平常は、部屋と庭を一緒に掃くものではないとされている。墓
入れ、石で重石をして土で埋める。まず近親者が股ぐらごしに四方から土をかける
（りゅうたつ）、四本幡、松明を立てる。松明の火は竜辰に燃え移り焼け落ちるが、そ
この火が焼け落ち倒れるとき、そのそばにいる人が次に死ぬといって、燃えているとき
なかったという。

⑧ 死後の供養

三日目に「三日のしあげ」をする。僧侶や組合の加勢人に「精進落とし」をしてその墓地では、埋葬墓の「段つけ」を行った。四角に竹を組んで、半畳の広さの段をつけかいって、なす、きゅうり、生米、茶の葉を混ぜた物を墓に供えた。その後、七日ごとに同じである。初七日（しょなぬか）・二七日（ふたなぬか）…三十五日・四十九日の忌侶を呼び、読経等で供養する。念仏講の盛んな時は、講中の人が長念仏を唱えたりもし で供養の後「精進落とし」をした。

2　ムラの習俗

（1）ムラのしくみ

ムラは元来、地区集落で、近世以降は地方行政機構と重なる部分が多い。ムラで暮らて も、取り決め、慣習、つき合いをもっている。民俗でのムラは岡垣の場合、今の区に主心とする世話役がいる。区長はその任に当たると、前任者から引渡物件として、書類入れの太鼓、提灯などを受け継ぎ、任に当たった。ムラにはさまざまな寄り合いがあるが、そているものに年始初めの集会がある。区全体の寄りは、「初寄り」、「初集会」、「相年始」の年間行事の話し合い、区の世話役の承認、区費の予算及び決算報告、ムラ人の祝事の報ラの共有地の収穫物の入札などが行われることもある。

① ムラの組織

ムラは、いくつかの小組にわかれている。小組は今の隣組のようなもので、日常生動、冠婚葬祭などの相互扶助など深い結びつきをもっている。

② 労働慣行

一般的なムラの労働慣行として、ユイ［結］とモヤイがある。ともにムラ単位や、ハきで成立する慣行である。モヤイの主なものとして、次の事柄があげられる。共有財産墓地、集会場、溜池、青年宿、消防の用具及び施設、舞台、共同風呂、井戸などが共有共同風呂や井戸は共有というよりモヤイといえる。ムラの神仏にかかわる共有田もあっかしとぎ田とか地名にその名残をみることができる。モヤイとは、共同で一つのこと行風呂は各ムラにあり、小組単位または血族単位で運営していたようである。風呂当番が番になると薪（まき）を手持ちで風呂を沸かす。入浴時間は、夏は午後6時ごろからだった。正月、盆、田植え時などは特に早くから風呂を沸かしていた。これも大正初期就労作業としては、三里松原の松葉かきがある。年中行事のひとつになっていて、春の弁当を持ち一日がかりで松葉かきをした。官山［浜山］の松葉を、くじを引いて各戸のする。松葉を上手にかき寄せて、長方形に固めて縄をかけ、六尺につきさして運ぶ。家ずんでおき、年中の燃料とされた。一時期、松葉の割り当てがムラにあり、ムラでは いって集金し納めていた。松ぼっくり拾いもあり、芦屋方面に売りに行くこともあっが、浜山ぞいのムラでは春と秋に産出する松露やキンタケを採集した。福岡県地理全誌も「松露壱石三斗代金五百円弐拾銭」とある。ムラの女たちの数少ない現金収入となれで糸を買い、布を織り着物を作ったりするたのしみとなった。浜山の肥松（こえま

でせりにかけられた。これを「天木せり」という。薪として燃料にするほか、餅つき用
材ともなった。天木とは、官有林の材木のことである。三里松原を横切って、響灘に
近くの黒山、糠塚、新松原では、冬の強い浜風で河口付近が砂で埋まると、川の流れ
田は泥水をかぶる。そのため、江尻が埋まると「江尻がつまるぞう」と触れが回った
り人手を集めて、くわやスコップで水の力を利用しながら排水のための作業をおこな
といった。ユイも共同労働の一形態であり、屋根替えや田植えなどの労力互助のしく
たが、近年では見かけられない。こうした慣行以外に、ムラの互助的な就労作業は、
ている。その内容は、農道、作業の普請、川及び溝さらえ、井ぜき作り、水当番、
内腹（うちばら）つき、栓抜（せんぬ）きなど]、やぶきり、草刈りがある。

③ 講

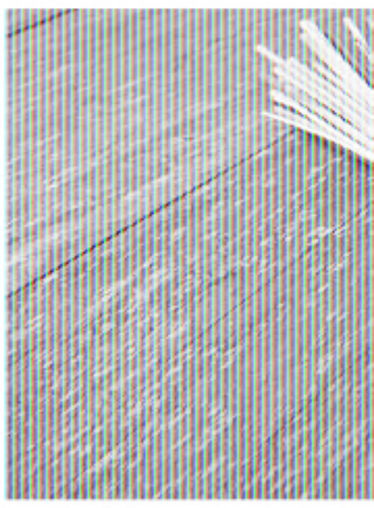
ムラの暮らしの中に、さまざまな目的と構成によるムラ人の集団がある。大別する
広辞苑によれば、「講」とは「①神仏を祭り、または参詣（さんけい）するために組織
団体または相互秩助組織の団体」とある。信仰的な講には、次のようなものがある。

・参宮講

お伊勢参り、伊勢講ともいわれる伊勢神宮参詣の団体である。岡垣でも江戸時代か
も盛んであったが、太平洋戦争の激化とともに中止された。糠塚では戦後再開され現
芦屋で船を仕立て二か月以上かかって参詣していたが、糠塚の須賀神社には伊勢講の
も掲げられている。その後、鉄道再開とともに国鉄の団体旅行に参加していくように
一生一度の大旅行であり、道中の無事を神に祈った。志賀島参りや絵馬の奉納など
ら、講に参加した者で同行寄りを繰り返し、親睦を深める寄りあいが行われている。
齢集団である親睦会を、同行寄（どうぎょうより）とよんでいるところもみられる。

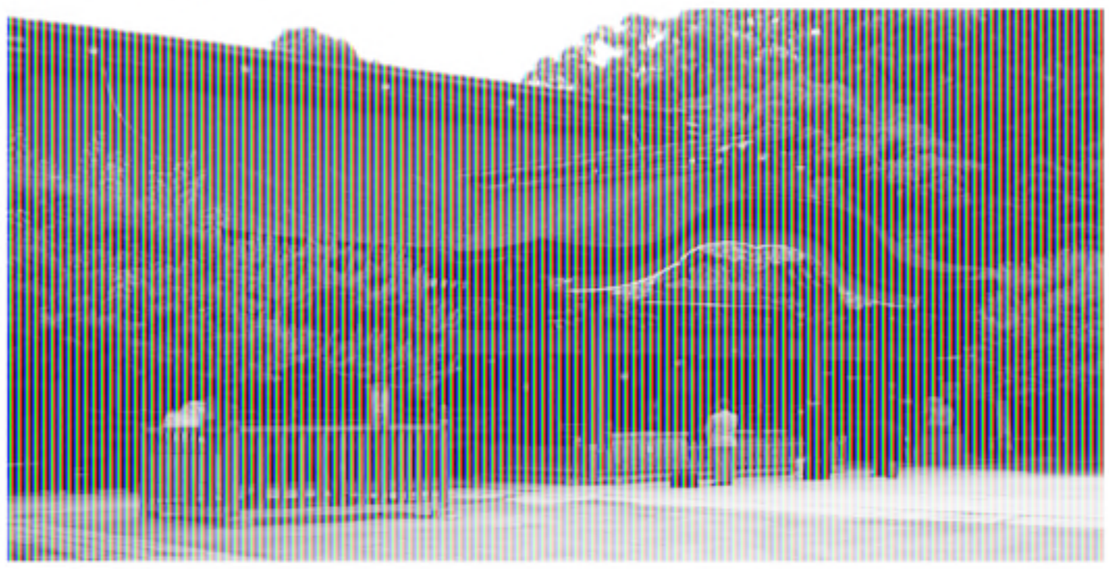
・彦山参り

英彦山へ牛馬の安全祈願に参るもので、熊笹を持ち帰り牛馬に食べさせたといわれている。彦山ガラガラを買ってきて、神棚に供えたり戸口にさげたりして魔除けにしている。



彦山ガラガラ

・宰府参り



太宰府天満宮

太宰府天満宮参りのことで、ムラに
のあるのは糠塚の榎坂で、代参（だい
は飛梅講（ひばいこう）と呼び、組の
詣する。残りは境（さか）迎えをして
代表者は天満宮と背後の宝満山の竈
る。ここで今年の農作物の作柄［農作
程度］が記されている作札（さくふだ
各家に配った。

・その他の講

各種の信仰と親睦を兼ねた講がムラや小組にある。その代表的なものが、庚申講（講である。戦争中、中断されて親睦の寄りとして再開されたムラもある。○○講・○○るが、小組で構成されたもの、性別、年齢別に構成されたものがある。各ムラにもみ例えると壮年は庚申組、天神組、主婦はお七夜組、観音講、老人はご詠歌組、お大師どがある。それぞれの組や講のほかに、ムラ人の暮らしの知恵ともいうべき経済的な て順番に欲しいものを購入していた。戸切のふとん講、頼母子講（たのもしこう）、 などがある。これもムラ人の親睦を兼ねたものであった。

④ 年齢集団

ムラのしくみの一つとして年齢、性別によって構成される集団がある。ムラ人は必 社会人となる社会教育訓練がなされる。また、人生儀礼［出生前から死をむかえ生ま 一つ一つの節目の役割も果たした。

・子供組（こどもぐみ）

昭和初期ころまでムラまたは小組で小学生が中心となり組織された。昔は「へこ［ ると参加した。年中行事への参加が主なものだが、異年齢集団のため、遊びの伝承な こ作り、こま回し、野鳥のわなかけ、木の実とり［うべ・あけび・しゃしゃぶ・山桃 遊びを通して子供なりの社会生活訓練が身についた。「おこもり」［神仏に祈願するた も楽しみの一つで、現在まで続いているムラもある。ムラの老人の話では、学校ごも もりと呼んでいたということで、その名に当時の役割がしのばれる。

・若者組（わかいもんぐみ）

ムラの年齢集団の中で、組織や活動が一番明確なものであり、ムラ人のくらしの中 た集団である。入会は、小学校高等科を卒業した十四、五歳の男子が、先輩の勧誘に 年頃の男子の家を訪れ、父親の立合いのもと勧められ入会に至る。入会の際はあいさ 習であった。退会は、結婚による自然退会がほとんどで、「あがる」ともいった。そ ムラもあった。退会も二十五と年齢を区切るムラもあった。若者組は、明治末期ころ れていったが、年功序列が明確で入会当初は先輩の使い走りから始まる。長は頭（ いっていた。活動の場は、主として若者宿である。ムラの氏神の社、仏様のお堂、有 や農機具などを収納する物置小屋］の二階、ムラの集会所等が当てられていた。そこ 人前の大人となる生活訓練、社会訓練がなされる。年長者が中心となって、礼儀作法 が指導された。また、足半、草履作りなど農業、生活用具の製作も身につけた。三吉 字、珠算などの学習の場とともなっていたところもある。社会訓練の大切な場として、 る。その一部であるが、現在まで続いているムラも多い。そのほかに、婚礼の荷運び、 原沿いのムラでは密航者の監視など広く活躍の場があった。活動資金も、ムラによっ 竹山をムラからもらい筍、竹の売却代金をあてる。三吉は、山で薪とりをし、その売 は、各種の催物をして収益を資金とした。波津では、浦方ということもあって、家内 も、ムラの娘たちはよそに年季奉公［雇用者との契約の下に一定期間働く雇用制度の が多く、組織も名ばかりのものであった。

・その他

若者組のＯＢ会や戸主組、いくつかのムラでは壮年男子［働き盛りの年ごろ、そ（ちゅうろうぐみ）がある。これに対して主婦たちは、国策の中で、明治三十四年の始まり、今日まで名称・活動内容は変化してもムラの集団として「婦人会」は今日も存婚圏をもつムラでは、宗像から嫁入りして来た人たちによる親睦集団「宗像寄り」があは、「宗像から嫁に来て寂しかろう」といって寄りがあるということだった。

（２）家族の生活

ムラを構成する基礎は家である。家は住居としての意味と、日本の伝承的な家父長的家を併せ持つ。イエというのは古くは「イヘ」で、イは接頭語で、ヘは「ヘッツイ」の意味ことだと言われている。だから、イエとは住居と、そこに居住する同じかまどの飯を食べ係を有する人々の一つの生活集団と考えることができる。家族労働が主体の時代は、家族き手が必要かによって家族構成の規模が決定されていた。農村では、その家の農業経営のなどでわかる。田畑が広い家では、二、三男、娘たちも必要な働き手であり、田畑が少な公に出たり、出稼ぎに行ったり、他の仕事を身につけたりするわけである。家族の呼び祖父は、ジイサン、ジイチャン。祖母は、バアサン、バアチャン。父は、トトサン、オサン、オカチャン。兄は、アンチャン。義兄は、アンサン。姉は、アネチャン。義姉は、が多い場合、大（おお）○○、中（なか）○○、チカ○○と呼び分けた。家父長制が生きた主（こしゅ）で、その力は強かった。その戸主権［家長権］の譲り渡しは、戸主の死亡に産と共に相続されるのが慣例であった。もう一つ、家にある権利を主婦権と言える。「しゃもじ渡し・財布渡し」といった。三世代同居の中で、嫁は野良仕事、姑（しゅうと役割が決まっていた。そこでは財布のひもも姑が握っており、その死によって初めて嫁た。岡垣町糠塚では、「やぶれ荒神（かまど神）もらおうちゃ、やよいこっちゃない」と言い伝えがある。これも主婦権に関わるといえる。しかし時代の変化により、その譲り渡きた。現在では戸主権、主婦権とも実質のない、形式だけの名となってしまっている。

① 分家慣行

相続はほとんど長子相続による直系家族の形をとる。したがって二、三男は家を出る家のことも隠居（いんきょ）という。隠居とは通常、戸主権を譲り渡すこと、またその のあと、親が他の子を連れて本家を出るので、分家のことを隠居と呼ぶ、その形の名る。分家する時は、本家は財産を分け与えるが、糠塚では「百姓のされるごと、いかな家の役目」といわれてきた。家屋敷、田畑、山林を分け与えるが、それは家に応じた畑の少ない家では、二、三男は手職［桶屋、大工、左官など］をつけたり、養子に出し を大事にしていたので、分家の家は本家の西側に立てた。分家が東側に立つと、「本家 言ったところもある。本家と分家は結の関係にある。本家に対する労働提供が当然存在 財産の使用もできた。本家を中心とする一族では、盆、正月などに同族寄りをしたり、 もある。先祖祭りの特色あるものとして、糠塚の「小市郎神」を神としてあがめ、安置 毎年九月十五日に一族が集まりお祭りをしていた。石祠（せきし）には、「天保五年 ある。石松一族と小市郎神のかかわりや石祠の由緒については不明である。元松原の に、三大まつり［お日待、恵比須様、空誉様］がある。この中で、安楽院の伝承とも

の祭りがある。空誉上人が、天正十三年［1585］大友の兵に討たれ、十一月十八日にし
は、空誉上人をはじめ、数多くの霊を慰めるため、死後の冥福を毎年十二月二十五日
る。あわせて、松原村先祖様として、百姓六人の絵姿の掛け軸と空誉上人の掛け軸を、
祖祭りを昭和五十七年ころまで行っていた。

② 家号（やごう）＊農漁村などで名字の代わりに用いるその家の呼び名

ムラでは本家・分家によるだけでなく同じ姓の家が多く、家を呼ぶのに姓を呼ばず
多い。家号では、先祖の職業で「トウフ屋」「アブラ屋」とか、村落中の位置から「オ
ヤシキ」「シタのイエ」とか呼ぶ。また、でみ（わき水）の近くだと、「デミのクチ」、
「シンヤ」「シンタク」とか呼ぶこともある。村役の名残を示すものとして「センヤク
う家号もある。しかし、今は次第にその家号も呼ぶことが少なくなってきている。

（3）祭りと信仰

ムラの人の日常にかかわる信仰と祭りは、暮らしと一体化した習俗である。岡垣のムラ
るための職業の実り多いことを、また家では家の永続を願ってさまざまな神仏を祀った。
社会にあたっては、家やムラ中で起こる不幸な出来事を避けるため、神や仏を勧請［祈っ
と］し祀り続けてきた。カミといっても、神道、道教、儒教、仏教のさまざまの形でムラ
れた。そして今なおムラの多くの人が従来する道筋に、道端の樹木が待ちまって生えてい
たち続けている。いまも瓦葺きの小さなお堂があちこちに見られ、古くからの信仰がムラ
続けていることがわかる。信仰や祭りの様子は、次のとおりである。

① 貫船社

どのムラにもあり、水神、祈雨神［雨をつかさどる神］として祀られている。糠塚が
いる。貫船、貫布禰社とも書かれ、各家で牛馬を飼っていた時は、クミで当場を決め毎
る灯火］をあげていた。灯明あげは、子どもの仕事で家の前に当場の札が来ると、家主
しろ）に灯明あげに行った。子ども心にとても怖かったという。

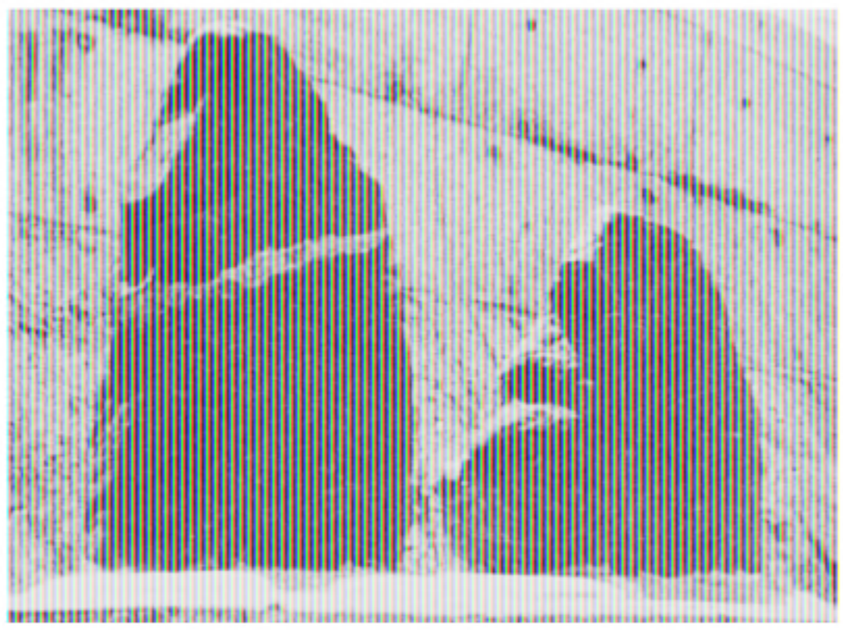
② 天神様

ムラには海老津の小局のように本殿、拝殿をもつ天満神社から小さな石祠の菅原社ま
が祀られている。天神社は、古くは田の神として農業信仰と結びついた農耕守護神であ
として菅原神を祀るようになったと考えられる。そこで、ムラでは子供たちが天神社で
時に習字を書いて備えていたムラもある。天神様と関係のあるものに、糠塚、黒山、口
仏がある。天神ごもりと同じ七月二十五日の夜行われる。糠塚では一週間続く。この夜
もたちが、ほおずき提灯を手にかねや太鼓をたたき、はやし言葉を言いながらムラ中を
言葉に、三つのムラとも「スガワラドンの供養じゃ」という語句が入って
いる。大念仏で供養じゃといいながらも、この行事は牛馬の厄払いのため
ともいわれる。黒山では、ムラ境で川を挟み二手に分かれてかけ合いで
「山田・糠塚やん［病（やみ）］もどし」と呼ばわった。この一週間の中日、
七日目に若者組の世話でかぼちゃ煮しめや五目飯をごちそうになった。食
べ残りは牛馬に食べさせていたということである。

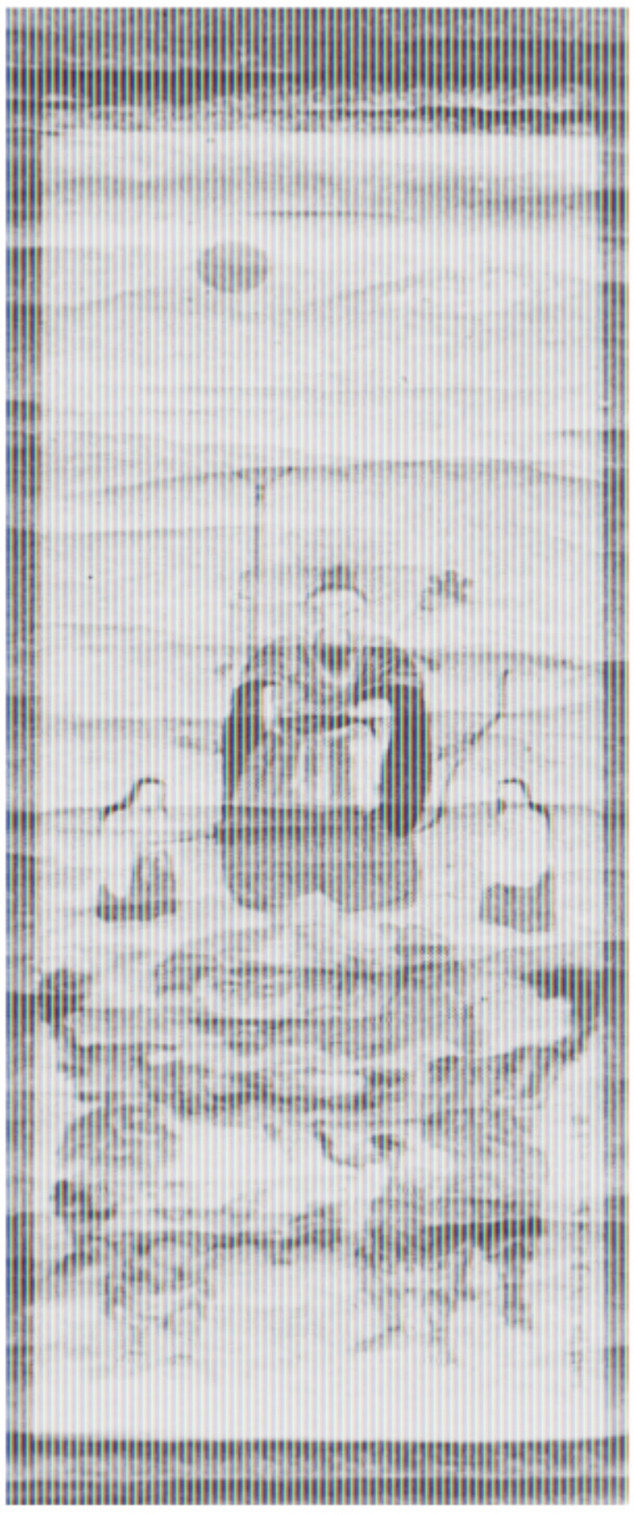
③ 庚申（こうしん）信仰

庚申［かのえさる／干支の五七番目］の日に寄り合って祀る信仰の団体の一つに、この日当番の家では、ごちそうが作られる。信仰の団体ごとに持ち回りの掛け軸［猿田て祀った。その時、徹夜する風習があったので、「話は、庚申様の時にせよ」というムラ境、分かれ道に多く見られる。その形状は、石柱に「庚申尊天」と刻まれたもの、「剛」を浮き彫りにしたもの等である。庚申様は青面剛尊から庚申猿、さらに猿田彦神にも考えられている。吉木矢口の分かれる所に違った三本の庚申塔が建っている。

庚申塔（吉木）



庚申塔（波津）



庚申掛軸（山田）

＊写真
（岡

④ お日待（おひまち）

太陽神信仰の一つにお日待がある。夜から当番の家に泊まり込んで次の朝の日の出を招いたり、座頭さんが訪れて拝んだりした所もある。お日待が今日まで続いているのは旧暦の十月十四～十五日、おくんち前に行う。当番家では「お日待雑記帳」が残り、出し方までが記されていて、祭りの様子が詳しくわかる。ごちそうは山の幸、川の幸ある。床の間に米・塩・柿・鏡飾・酒・稲穂細工などを供え、神官を招いて真夜中・日をあげてもらったという。

⑤ 疫神（やくじん）社

岡垣では旧岡県村にだけみられる信仰で、古くから信仰されており、中世は御霊祭日、疫神様ごもりをするが、これは侵入してくる疫神を御籠りをしてもてなし、ここだといわれている。元松原の浜山、什天堂の浜山などに鳥居をもつ小さな石祠がある。

⑥ 菩薩（ぼさつ）信仰

現世利益につながる菩薩信仰は、病気の治癒、子供の無事な成長を願って祀られる地じる法会などで祀る観世音菩薩などに多くみられる。山田の足垂（あしたれ）地蔵は一える仏であり、黒山のいぼとり地蔵はその名のとおりであり、高倉金久曽（かなくそ）きく仏である。この地蔵様・観音様のお祭りでは、小さなグループの子供たちの千灯が行われる。灯明銭（とうみょうせん）を切り、夜半まで灯をあげる。吉木では八月二が行列を作り「今晩は古小路（こしょうじ）の、お地蔵さまでございます、どうかお をつけて組中に触れて回り、その晩、青竹を二つに割り、それにろうそくをともす。そ踊りをした弥勒（みろく）菩薩は、農業にご利益のある仏として信仰を集める。五穀豊て祀られている。

⑦ 如来（にょらい）信仰

薬師、阿弥陀、大日の三如来がムラで祀られている。薬つぼを手にもつ薬師如来は、られている。なかでも手野の薬師如来は、脇侍［本尊の両脇または周囲に控えている仏十二神将を伴ったもので、今日までムラの老人の手で祀り続けられている。大日如来や札所［仏教の霊場で巡礼者が参詣のしるしとして札を受け納める所］には六か所祀られ覚寺の本尊［信仰・礼拝の中心として寺院の本堂などに安置される仏・菩薩像］とい は、今は方二間の彫刻、彩色のある大日堂に安置されている。この本尊の由緒は、昔、糠塚の人にのみ動かすことができ、背負って現在地に祀ったのが始まりといわれる。大 光明を備えた最高で至上の仏とされているが、糠塚では「疱瘡（ほうそう）（ウイルス感染症）」によくきく仏として近在の信仰をも集めている。

⑧ 千人参り

第一番芦屋町浜口の釈迦如来から始まる遠賀川西四国八十八ヶ所の札所のうち岡垣［三牟田］薬師如来から七十三番の糠塚の釈迦如来、奥之院までである。明治三十六年か 泊五日で札打納めをする。途中、村々の家に宿泊する。村の札所に参詣しながら、ムラ 接待にあずかるのは今も同じである。西国三十三ヶ所通りは観音講ともいわれ、すべて る所を巡拝する。第一番は波津如意論観世音菩薩である。両方とも、ムラに世話人がい する側の指図をする。

⑨ 大師講

弘法大師信仰の人々の寄りで、ムラのおばあちゃんたちの信者団体として多い。以前 師様ごもりをする。大きな念株があり、ムラの悔やみには長念仏を行った。

Ⅱ ムラの言い伝え

1　ムラの民話と伝説

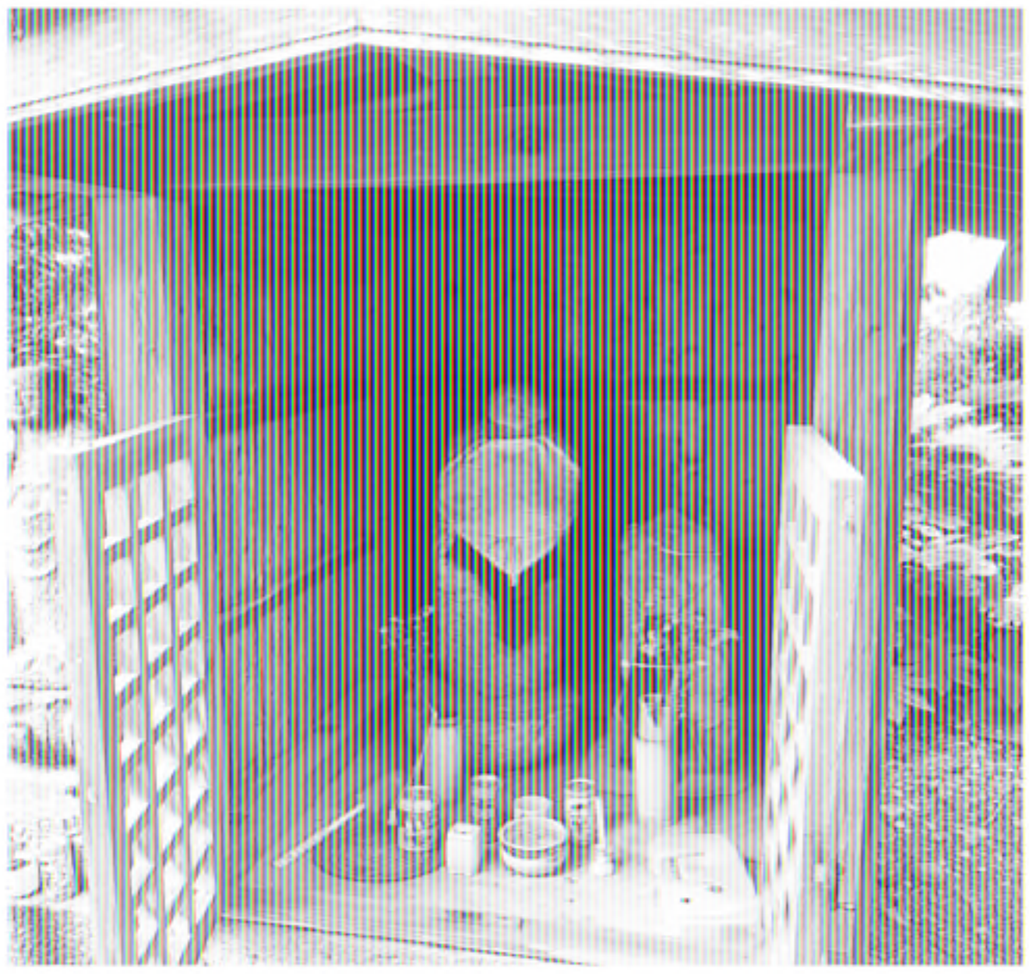
（1）そば粉と善財坊［ぜんざいぼう］

江戸時代の終わりころ、厨子を背負った旅の僧が行き倒れ同様に内浦にたどり着き一の人は、重い皮膚病を信仰の力で治そうと全国行脚の途中でした。部屋に通され、疲れる様態が悪くなりました。このままでは、親切にしてくださったこの家の人に迷惑をかけてしまうと思い、書き置きをして、はうようにして浜山の方に行きました。次の朝、家の人が様子を見に行くとだれもいません。そこに、一通の書き物がありました。それには「（重い皮膚病は）新しいそば粉を持ってお参りし、古いそば粉を持って帰り、患部に塗ると治ります」とかいてありました。近くを探したところ、砂山の一角に穴を掘り、身を投じて、自ら生き仏になった僧の姿を発見しました。村人はこの僧に心うたれ、丁寧に葬りました。

善財

注：
内浦の青空市場から波津寄りに少し入ったところに善財坊を祀ったお堂がある。かつては、鞍手や粕屋などからもお参りする人たちがいた。今でも八月二十九日の命日には、子どもたちが千灯明をつけてお祭りし、区の人たちがお参りしている。

（2）悲恋二体地蔵［ひれんにたいじぞう］


二体地蔵（内浦）

内浦の長源寺山門の横に首なし二体地蔵が祀寺に奉公に来ていた美男の小僧と内浦の里の気の仲になりました。そのうち、お嫁さんにもら頼みに行きました。すると、父が、「お前のよもっと修行をつんでこい」と言われました。そ僧は京に上り、医術の修行に励みました。歳月一刻も早く娘さんに会いたいと、内浦の里へ帰んください」と久しぶりに訪ねた娘さんの家に あるので、人がたくさん集まっていました。わ は困った顔になりました。出てきた父親は、「お てくれ、帰れ」とののしりました。いったんは 思いに堪え切れず、取って返したその男は、座 をいたせ」と娘を刺し自らも命を絶ちました。 なかった二人を添わしてやろうと、地蔵様がで

（３）名馬摺墨［するすみ］と牧場

筑前国続風土記によると、初浦の上に大きな牧場跡があり、周囲に溝があって湯川山に
たかわからないが神代の牧場であるという。また筑前風土記拾遺には、「牧大明神、湯川
り、馬頭観音の像がある。本地仏であり氏神である。これは馬の牧場の守護神だからこ
と、ここの馬牧は大変古い時代からあるのだろう」ともある。この牧場から、源平合戦に
いで有名な名馬摺墨を産出したといわれる。摺墨は、源氏の武将梶原源太景季（かげすえ
墨は、戦後自分の主人も戦死してしまったから、自分の育った湯川山が恋しくなった。に
黒山から湯川山を見た時、安堵したのか力つきて倒れてしまった。それで、西黒山の春日
神として祀っている。西黒山では、九月十三日、牛馬の神様として、おこもりをしていた。この摺墨が西黒山に帰って来て、石を踏んでいないたら蹄の跡がついたといい、直径一メートルの大石に蹄の形の穴のついた石が、湯川の牧神社の境内にある。湯川の海岸に黒崎という所があって、そこの断崖に草が生えているが、摺墨はその草を秣（まぐさ）にしたので名馬草といった。

＊イラスト　25～
（岡垣町教育委員

（４）碁石原と七不思議

原松原の安楽院の横を登って行くと、小高い所があり、その一番高い所を高浜の辻とい
石山）ともいって、今でも碁石がたくさんある。昔の安楽院は、ここに建っていた。安楽
代の天正十三年（一五八五）、大友宗麟が城山を攻め落とした後、安楽院も焼き討ちされ
た。この時、非業の最後を遂げた人々の慰霊法要が行われ、波津の海岸より、法要碁石が
た。その後も運ばれてきたが、持ち帰る人はいない。持ち帰ると、たちまち腹が痛みだす
この碁石原（山）には、七不思議が伝えられている。『吉木旧記』によると、次のとおり

一つ　碁石山の碁石昔よりうずもれず。
二つ　里民はよく他人の足形を知っているので、盗人の詮議に大変重宝である。
三つ　雀の羽音がしない。
四つ　響灘の波の音は一向に聞こえない。
五つ　砂山とはいえ、穀物に砂は入らない。
六つ　昔よりお産で死んだものはいない。
七つ　雨が降っても、音がしない。

（５）八かめ一空［やかめひとから］

岡垣中学校の所を、辻の栄という。いつの時代か、ここを巫女さんに拝んでもらったり
きて、「わたしは辻の栄の豪家の召し使いだか、土中にお金を埋めるのを手伝った。とこ
ると、わたしは殺された。それでわたしの霊魂はここからでれない」と言った。それで
て、八つのかめに金を入れ埋めたが、一つは空きであると伝えられた。昭和二十八年岡垣
とき、中国古銭が一杯入った「かめ」が掘り出された。三二種類で約八〇〇〇枚、総量
確認された。

（６）野間のハシゴソーメン

この話については、次の二つのことが伝えられている。一つは、ソーメンが長いので、ハシゴに掛けて、下の方から食べた。それで、ハシゴソーメンという。もう一つは、橋ことである。野間の世々池付近を、世々町といって、その中に、橋本五郎左衛門という商く販売していた。橋本五郎左衛門素麺という名は長すぎるので、橋本のハシ、五郎左衛門シゴソーメンといったという。

（７）道満［どうまん］さま

昔、江戸で、友達がみんな嫁さんに行かっしゃるばって、いっちょ（ひとつも）もらいてがない娘がおったげな。ある日、娘が占い師におうたら（会う）、「あんたの婿さんは、江戸には、おらっしゃれんばい（おられない）。岡垣の手野ちゅう所に行きゃあ（行くと）、その大山で、墨を焼きござる人をたんねて（訪ねて）行きなっせい（行きなさい）。その人じゃなかな（なければ）あんたの婿さんじゃない」といわっしゃっげな。そんでき（それで）、岡垣の手野まで来て、大山で炭を焼きござる人をたんねたら（訪ねる）、須藤道満ちゅう人が、炭を焼きござった（焼いておられた）。そげなふうで（その様な状態で）、

＊イラスト　27頁『岡垣町伝承民話集』（岡垣町

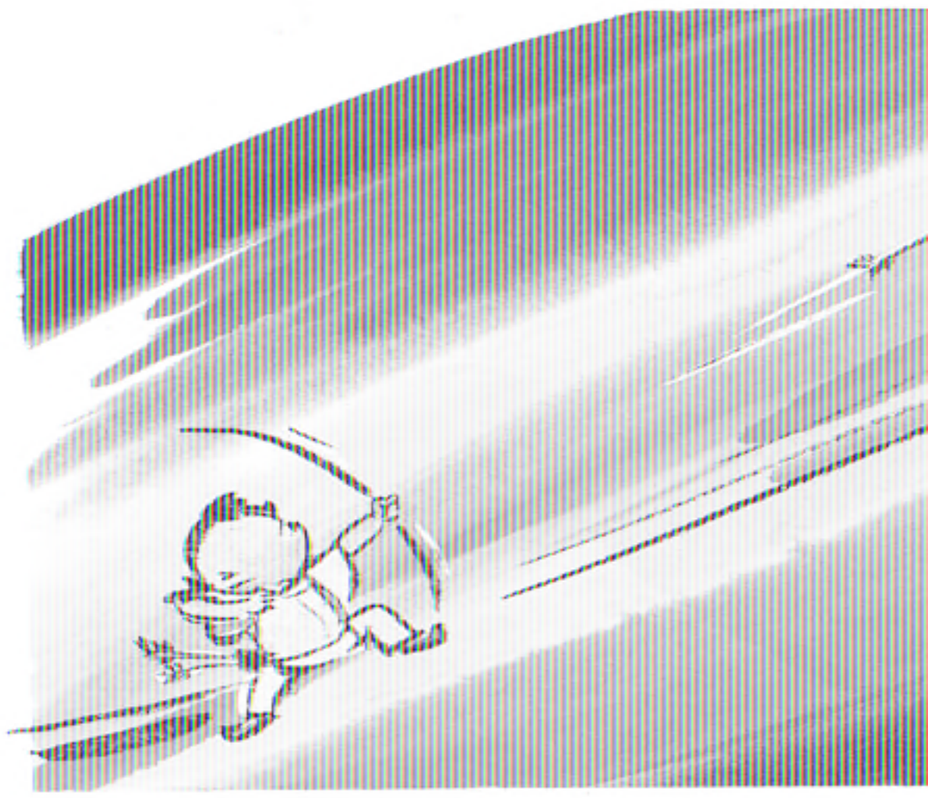
道満さんに、「友達がそうよ嫁さんに、行かっしゃったけんど、私だけもろうてくれてな人）、こげなふうで（こんな理由で）あなたよりほかに私の婿さんになってやりてがな「おれのげなとで（私のような者）いいなら、おりゃいいわい（おればよい）」といわっろうた。この嫁女は、江戸で良か家じゃったげなき、たいそう大判、小判を持って来らになったそうな）。ある日、嫁女はなんぼか（いくらか）、大判、小判を渡して、「これてきてつかあさい（ください）」ちゅうて（といって）頼んだら、道満さんは買い物に行の大判、小判をもろうて（もらって）、山を下りござった（おりる）ら途中の堤に、カモき（泳いでいたので）、そのカモに当てちゃうと思うて、大判、小判をそうよ（みんなてしまわっしゃったげな。大判、小判はいっちょもカモに当たらんで、そうよ（全部）家さい（家に）帰ったら、「あんた、おかず買うてきてやらっしゃった」といわれて、「にカモが浮いとったき、そうよなんかけてしもうて、なあも買うてきとらん」といわっんたのさっしゃる事、あんだけのお金がありゃ、だいぶおかずが買われてますっちゃがん、あげな（あんな）もんなおまえ、そこの山に行きゃ、なんぼでもあらい」と、道満そんで、道満さんが、それを見せてやるちゅうて、嫁さんがついて行ったげな。そしたに、なあーんて、大判、小判が山についてござらっしゃるき、「まあ、こりゃたいしたたまげて（びっくり）しもうた。その金を、そうよ持って帰ってきて、この下の手野の

を、そうよ買わっしゃったげな、なーんて広い田やき、田植えさんも百人から雇うて、日
う日の入らっしゃるまで田植えがしまえそうやなあと思うとったら、松山の稲場に、黒
よったげな。田植えさんの一人が、「あーすこ見てみい、猿が馬に乗って通りよるざい」
百人のもんが、そうよ立って見たち。そげん事で、ちゃんと日が下ってしもうて、今日さ
さならん田植えが、しまえんごとある。そげなふうで、道満さんが「招き」という所に
「おてんとうさん、もういっぺん上がってつかあさい。あの田植えが、今日しまえんか
日がずらーと、三尺上がらっしゃった。そしたら、百人からの人で植えよるき、田植え
みんな喜んだげな。

注：
この話は、須藤駿河守行重にまつわるものである。彼は、手野に座敷を構えた室町時
彼の墓も残されていて、手野では、彼のことを、「どうまんさま」と呼んでいる。

（8）矢矧川［やはぎがわ］と弓の矢

兵士はこの川べに、すばらしい弓の矢となる竹林を発見した。さっそく、数本の弓の矢をつくって、ためしに川を下り海岸にでた。東北の海べに小じまが見えた。それは、山鹿岬にほどちかいところの、海岸につきだした岩山だった。兵士は弓を力いっぱいひきしぼり、ためしの矢をはなった。「あっ、あたった！なんということだろう」と、自分の目をうたがうように見た。つきでた岩山に、すっぽりとあながあいていた。兵士はよろこびいさんで、神功皇后にもうしあげた。皇后は、この川を矢矧川とよばれ、いまでも言い伝えられている。なお弓でうちぬかれた岩山は、洞山といわれるようになった。



＊イラスト　7～8頁『岡垣町
（岡垣町教育委員会）1995

（9）えんま様になった嘉一郎［かいちろう］

むかし、ずっとむかし、岡垣の里、元松原のお宮の近くに、嘉一郎という、さいもんか
人がおったとき。日頃は正直なのんきもので、よくはたらいていましたが、若いころけん
ので、死んでから地獄に落ちてしまった。じごくにはえんま様がいて、生きていた時のお
ろとよみあげて、さばきをします。嘉一郎は白いきものを着て、おおぜいの亡者たちと
くって、まっていました。嘉一郎はいたってのんきものでしたので、亡者たちがおそれお
な顔をして、あたりを見回していました。その内赤鬼が大きな声で、「元松原の嘉一郎
ました。すると青鬼が嘉一郎のからだを、ひょいとつまみ上げて、えんま様の前へぽいと
とんとしていると、えんま様は目をきらきらさせて、「おい！お前はなんちゅう名前じゃ
一郎は「わたしゃあ、元松原の嘉一郎ですが、どんな用がありますとな」といいますと、
れからたずねることに、ちょっとでもうそをついちゃならんぞ。どんなうそをついても

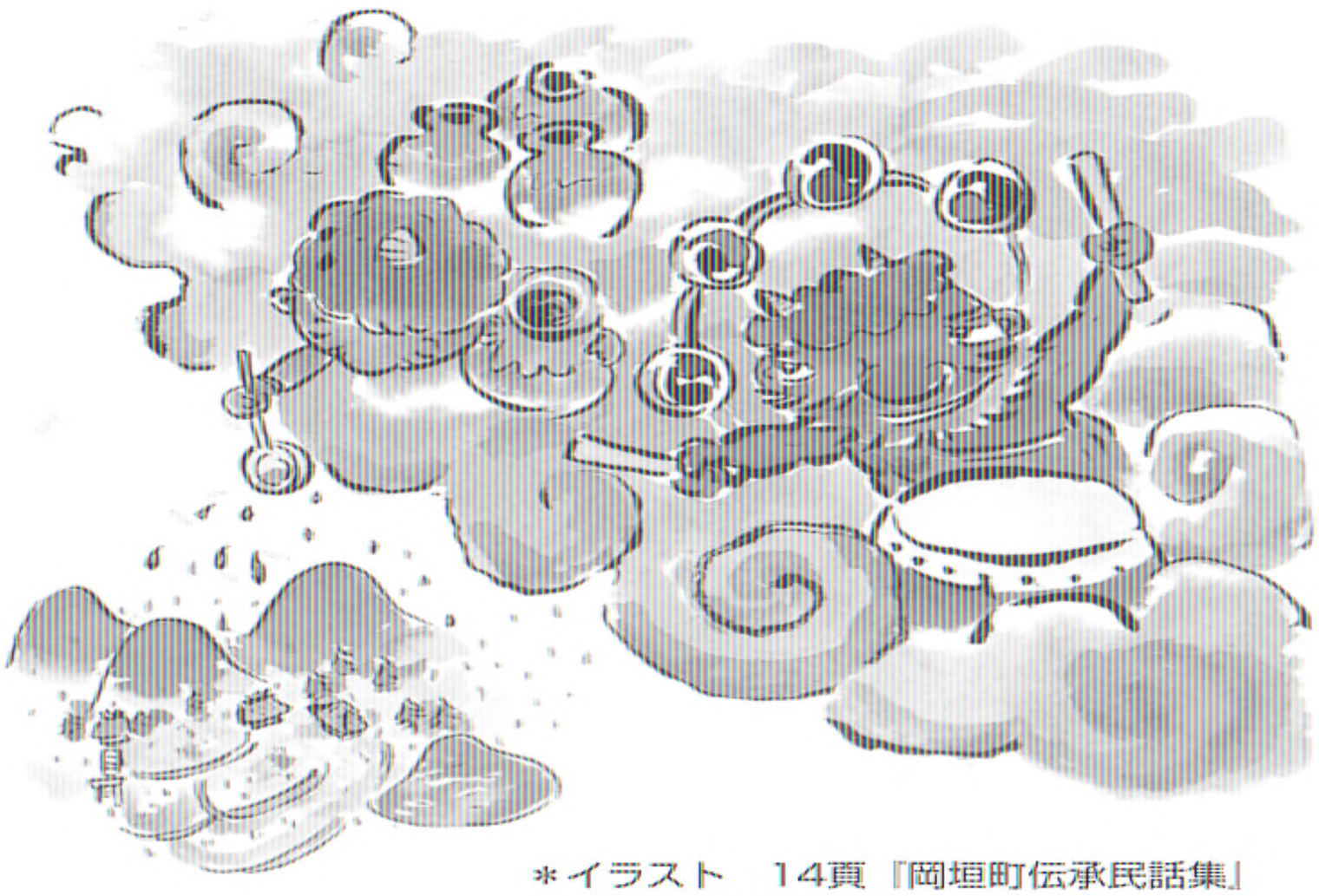
「じょうはりのかがみ（浄玻璃の鏡／えんま王庁にあり亡者の生前の行いを映し出すとい一生のあいだにしたことが、ありのままにのこらずうつるからなあ。ところでおまえは、をやっておったんかいな？」「あたしゃあ、仕事よりさいもんがたりがだいすきですばい た。「なに！なんじゃそのさいもんがたりちゃ、どんなことをするのじゃ。わしにもうす と、といかえしました。嘉一郎は、「ほほう、えんま様はしってらっしゃれんのか。さい のできごとをふしをつけてうたうんや。それをきくと、にんげんならだれでもおもしろか ました。すると、えんま様は、「そうかい。そんなおもしろいもんなら、わしにもひとつ れんかい。さっきから、人間どものあくじの、みっともない話ばかり聞いとるもんやけ どうあってもやれ！。もし、わしのいことときかんにゃ、おにどもにめいじて、てつぼう ぞ！」とどなりつけました。嘉一郎はすこしおかしくなりましたが、真面目な顔をして いといわっしやるなら、一度さいもんがたってみてもよかとです。だが、このさいもんて 座のひくいとこにおっては、うたえんもんじゃ。高座うえにあがってしせいをようしてい れんで、えんま様と、おらといれかわって、あんたはこの下座へきてつかあさい。」とい ちょっといやな顔をしていましたが、さいもんをききたいばかりに下座におりました。嘉 んま様の高座に座りました。そのとたん、ふしぎなことに、嘉一郎がえんまのすがたに は、嘉一郎のかわりに、亡者のすがたになりました。ゆかいになった嘉一郎は、大声を あ！、えんま！、おまえはこれまでずいぶん、たくさんの人間をひどい目にあわせたな おまえははりのじごくから、火の地獄へおちていけ。赤おに、青鬼どもよ、なにをしとな いいました。すると、あわれなことに、もとのえんま様は、鬼共にせめられて、そのままじごくのそこへきえていきました。それからのち、嘉一郎は長くじごくにすんで、えんま様のしごとをつとめました。そしてじぶんの生まれた元松原の人が死んで、じごくへおちてくると、「おまえは元松原の人かい。おれ、生きてるときに、村のしゅうにかわいがってもろうて、しゃばは、たのしゅうすごしてきたものじゃ。おんがえしに、元松原の人だけはじごくにはおらんから、さあさあ、ぎゃくもどりして極楽へいかっしゃい。」といって青鬼に、極楽の門まであんないさせましたげな。

＊イラスト　2頁『岡垣町伝承民話集』（岡

（10）源五郎鮒［げんごろうぶな］

むかし、むかし、岡垣の里吉木に、「門田」という大きな堤がありました。どこのふな かくすんでいるが、門田の源五郎ぶなは、水面近くを泳ぎ、秋になると、堤に散ったもみ 赤くすることがあるので、もみじぶな、ともいっていました。この源五郎ぶなについて がありますが、「ふなになった源五郎」という、むかしばなしもかたられています。

むかし、あるところに源五郎という、なまけもんがおったげな。そしていい年をして 食っちゃあね、食っちゃあねをしておりました。父はある日、たいへんおこって、「やい なものじゃねぇ！おまえはひとつたびに出て、他人の飯でも食ってこい！」と源五郎を



＊イラスト　14頁『岡垣町伝承民話集』
（岡垣町教育委員会）1995年

は、あてもなくいくと、ひ
び止められました。「そりゃ
とうりや。そこでおれんと
やらんか？飯はたくさん食
とで、畑のだいこんぬきを
入れすぎて、だいこんをホ
ので、そのひゃくしょうの
いました。源五郎は当ても
おけやが話しかけてきまし
のいうとうりじゃ。おれの
めをやらんか。めしはた
なって、おけやではたらく
る日、おけのタガをはめよ
とタガにはじきとばされて
た。そして、落ちたところ
のにわでしたと。かさやの
降ってきたので、たまげて、わけをききました。「そら、父っつあんの言う通りじゃ。
さはりをやれ。飯はたくさん食わすからなぁ」と、なって、源五郎は、かさやのしょく
日、かさをかわかそうとひろげたとき、おおかぜがゴーッ、ゴーッとふいてきて、源五
吹き上げられました。空の上では、かみなりの親分が、地上から人間が飛んできたので、
を聞きました。「そら、父っつぁんのいう通りじゃ。だが天には、大阪や京とちごうて
らの手下になって水まきをせんか。飯ならたくさん食わすぞ。」と、いって、源五郎は、
てしまいました。水まきとは、かみなりがたいこをたたいてあるき、そのうしろについ
かめの中の水をげかいにむけてふりまくしごとです。デンデコ、デンデコ、デンデコデ
コ、ドンドコドン！源五郎は、たいこにあせて水をまきました。「ほー、なかなかやりよ
うととはおもえんぞ。前にもやっていたなぁ」とかみなりの親分がほめてくれました
ちょっとづつまいているのがめんどうになって、かめの水をジャー、ジャーとぶちまけ
の堤」ができたということです。おこったのはかみなりの親分。向こうの雲から、「やい
とをしてくれたんだ。おれのとっておきの三尾図をぶちまけてしもうて。こっちこい！
こを、ひっこぬくぞ。ばかもの！」と、どなりました。源五郎は、ちぢみ上がりました
してください。これからは、うまくまきますから」と、かみなりの雲にとびうつったと
真っさかしまにおちていきました。そしておちたところは、なんと源五郎がまいた水で
いわれています。門田の堤にしずんだ兼五郎は、ふなになってしもうたが、ときどき水
つぁん、たにんのめしを食うってたいへんだなぁ」といってるのだと。秋になると村の
を食べているそうだと。

（11）垂水峠［たるみとうげ］のカッパ

岡垣町と宗像郡玄海町とのさかいに垂水峠があります。むかしは樽見峠と呼ばれてい
むかし、むかし、あるあつい夏のことでした。一人のわかものが、峠に向かって、なが
と休みしていました。すると、「もし、もし…」と、人の声がするので、ふりかえって見

んが近づいて、「すんまっせん。このたるを芦屋のかいせんどんやまでとどけてつかぁさ
ははずんでやりますき」といって、このあつさに、みのかさをつけた、みょうなろうじん
おろしました。「この暑いのに芦屋まではこぶのはきついばい。あんたがはこばんのはと
た。すると、ろうじんは「わしはこのとうり年をとっているし、気分もわるい。それに、
やき、どうかたのみをきいてつかあさい」といって、なんども頭を下げて頼みました。や
し、おれいもはずんでもらえるということだから、「じゃ、いいばい。おれもどうせ芦屋
けてやろうたい」と、わかものは返事をしました。「そりゃ、ありがたい。わしを助けな
お願いします。それにこの手紙もいっしょにわたしてつかあさい。ただ途中でどげなこと
とたるの中はみらんと、やくそくしてつかあさい」といって、とどけさきを教えてく
ちょっと変だなあと思いながらも、「よし、よし、わかった」といって、たるをせおいま
いようがギラギラてる中を、いっしょうけんめい歩きました。ぐるぐると曲がりくねった
めたところに峠がありました。わかものは、たるをせなかからおろしました。「ワーッ
青い海の色、食べたいごたある」と思わず声を上げました。しばらく周りの景色にみとれ
と、さっきあった、いようなろうじんのすがたをおもいうかべました。「なんじゃろうか
おもうと、わかものは、きゅうに手紙のないようが知りたくなってそっとやぶれないよう
いてみると、小さな紙がたった一枚入っていました。それには、「そのしりをもって、千
りました。わかものには、このなぞのようなことばのいみが、どうしてもわかりませんで
とうそばにおいてある、たるのふたに手をかけました。「たるの中を見たら、このなぞ
とおもったからです。どうしようかと、しばらくはしあんしているようでしたが。矢のま
しんに、わかものはこんまけしてしまいました。たるのふたをそろっと（しずかに）あけ
…」という叫び声と、たるのふたがあいたのはほとんどどうじでした。わかものは、かお
くなって、手足がふるえ、こしをぬかしころげるようにして、いちもくさんにふもとへ下っていきました。たるの中には、人間のしりがいっぱいつめてあったのです。それが九百九十九で、このわかもののしりをくわえると、千になるかんじょうでした。わかものは、やっと「このしりをもって千じりなり」という手紙のいみがわかり、あやうく、いのちをおとすところだったと気がついて、せすじにぞっとつめたいものがはしるのをかんじました。これがかっぱのしわざであることに、皆さんたちもお気付きと思いますが、このことがあってから、この峠を樽見峠といいつたえられ、いつとはなしに垂水峠と書くようになりました。

＊イラスト　17頁『
（岡垣町教育委員会

2　生活の中の知識

（１）俗信とことわざ

①予兆

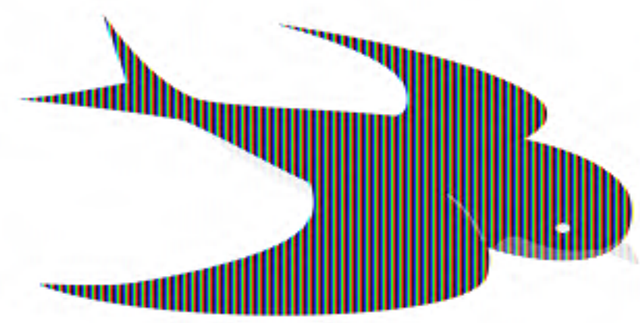
＊天気に関するもの

〇蟻（あり）の引っ越し大雨のしるし

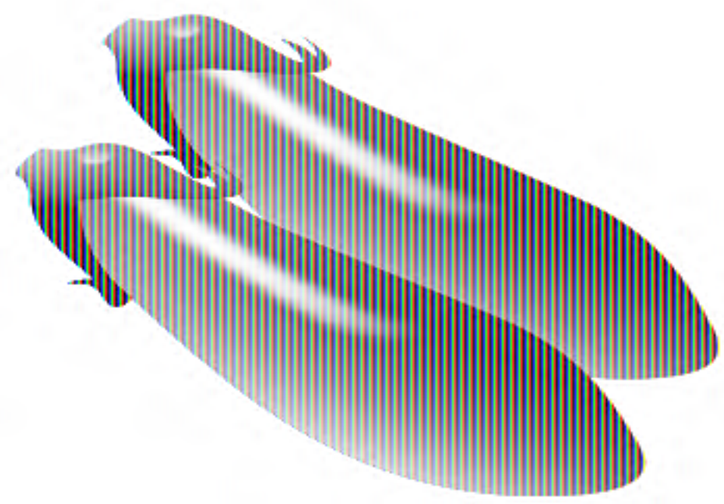
〇蟹（かに）が畳に上がると大雨になる

○魚が水面に飛び上がると雨
○柿の豊作は米も豊作
○猫が顔を洗うと天気がいい
○雪が降ると豊作になる
○星が光る夜は霜が降る
○雨蛙が家の中に入ると大水になる

＊吉凶に関するもの
○眉毛の長いものは長生きする
○蛇の夢は金持ちになる
○つばめが巣を作ると縁起がいい
○朝、茶柱が立つと縁起がいい
○夕方の下がり蜘蛛は縁起が悪い
○げじげじが頭をはうとはげになる
○足袋をはいて寝ると親の死に目に会えぬ
○歯の抜けた夢を見ると縁起が悪い
○火事の夢は縁起がいい



② 禁忌
○ご飯を食べてすぐ寝ると牛になる
○秋茄子は嫁に食べさせるな
○鶏の羽を屋根に上げると火事が起きる
○敷居の上に立つな
○ヘソのごみをほじくると腹が痛くなる



③ 妊娠・出産・育児
○子供が股のぞきをすると次の子を妊娠している
○あわびを食べると産後の脱毛を防ぐ
○柄杓（ひしゃく）のまま水を飲むと大口の子が産まれる
○いちょうの木を削り煎じて飲ませると乳がよく出る

（2）民間療法

① [風邪]
みかん、金かんの絞り汁を飲む。梅干しの黒焼きに熱湯を注いで飲む。卵酒を飲む。

② [咳]
オオバコ、ゲンノショウコ、ドクダミの陰干しを煎じて飲む。

③ [鼻詰まり]
塩水を鼻にすすり込んで出す。

④［扁桃腺］
焼酎をガーゼにしめし、喉にまく。

⑤［頭痛］
こめかみに梅干の皮をはりつける。

⑥［腹痛・下痢］
梅酒や梅肉エキスを飲む。センブリ、ゲンノショウコの陰干しを煎じて飲む。ハフ
にゃくを温めて腹にまく。

⑦［胃腸・血圧］
柿の葉を干しておいて、煎じて飲む。

⑧［歯痛］
塩を詰める。玉ねぎをすって、頬につける。梅干の皮とニンニクを下ろしたものを
る。セイロ丸を詰める。

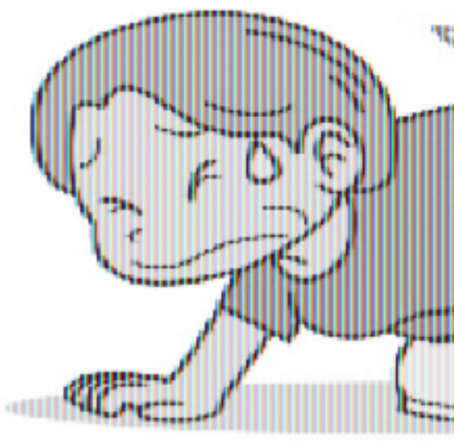
⑨［つき目］
牛がらみを切った汁を目につける。

⑩［眼病］
ホトトギスの油や野ブドウの汁をつける。南天の実を煎じて飲む。

⑪［かすみ目］
母乳をたらす。

⑫［耳だれ］
ユキノシタのもみ汁をつける。

⑬［腰痛］
夏みかんの皮を風呂に入れて、入浴する。



⑭［肺炎］
鯉の生血を飲む。

⑮［結核］
鯉の肝を食べる。ひらくち（マムシ）を乾かして、粉にして飲む。

⑯［神経痛］
サルカケイゲの木にいる虫をすりつぶして、酒を入れて飲む。ヨモギ（フツ）の葉の

⑰［疳（かん）の虫］

柳の木などにいるクサギ虫の黒焼きを食べる。

⑱［はしか］

伊勢エビの殻を煎じて飲む。

⑲［中風］

渋柿の葉、シャクナゲの葉の陰干しを煎じて飲む。

柿の渋を飲む。ダズの木の葉をもんでつける。

＊写真　タズの葉　974頁「
（岡垣町史編纂委員会）19

⑳［打ち身・くじき］

椿の葉の汁をご飯で練ったもの、たまごの白味と小麦粉を酢で練ったもの、里芋を
ものの、彼岸花の根をすって小麦粉と練ったものなどをつける。

㉑［火傷］

原では、火傷薬を作っている人がいた。漢方薬の原料を仕入れて、麦ご飯とまぜて
に塗りこう薬のようにして患部にはると、よくなればはげ落ちた。火傷がひどい時は、
和二十年ころまで作っていた。種油、ごま油、柿の渋、ツワブキの葉の汁、アロエの

㉒［外傷］

ヨモギをもんで、汁を出しつける。刻みタバコをつける。ムカデを種油につけておい
酎漬のひらくちの皮をはる。ひらくちの皮をはると、熱がとれる。梅干の皮をはる。

㉓［水虫］

ムカデを種油をつけておいたものをつける。

㉔［あか切れ］

ジジババのねをすってつける。タズ草を塩もみにしてつける。

㉕［しもやけ］

カラウスリの熟れた実をとっておいて、黒焼きにしたものをご飯で練ってつける。

㉖［あせご］

海水浴をする。桃の葉か栗の葉を煎じてつける。桃の葉を湯に入れて、入浴する。

㉗［かぶれ］

サワガニを生のまますりつぶして、汁をぬる。

㉘［はれもの］

ドクダミを煎じて飲む。酢酸酢を薄めて塗る。

㉙［できもの］

彼岸花や水仙の球根をすりつぶし、ご飯で練ってはる。ひらくちの皮をはって吸い出

㉚［蜂刺され］

アサガオの葉をもんで、汁をつける。

㉛［たず（皮膚病）］

タズの葉を塩もみにしてつける。

㉜［乳の腫れ］

水仙の根をすってつける。

（３）呪的療法

①［頭痛］

水の入ったお盆に、祖父母が息を三回吹きかけ、木戸口の目立たぬところに置いて打

とを「水せがき」といった。

②［風邪］

おひつの中にご飯とお茶を入れて、三回息を吹きかける。そして、後ろ首の毛を一

き、人のいない所で三回拝む。手野ではこのことを「みんせがき」と言った。

③［鼻血］

首の毛を二、三本抜く。

④［できもの・水虫］

七夕の日に、水口（田）に行って、手を洗うと、「できもんができん」とか、「水虫が

⑤その他

＊五月五日の菖蒲を頭に巻くと年中病気をしない

＊野菜の初物を食べると七十五日長生きする

＊南天の箸を使うと歯痛が起こらない

＊猿の面（絵や泥で作ったもの）を牛馬の戸口にはったりつるしておくと、牛馬が病

平成29年度　岡垣町・九州共立大学　地域連携事業

岡垣学Ⅱ

発行　平成29年11月

山田研究室
〒807-8585 北九州市八幡西区自由ケ丘1－8
TEL：093－693－3403
E-mail：y-akira@kyukyo-u.ac.jp

九州共立大学
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY